

Barbara Pym : *Excellent Women*¹⁾

——「すばらしい女性」からすばらしい女性へ——

岡 村 久 子

表題の *Excellent Women* とは、面倒な係累をもたない、適齢期を過ぎた、独身女性を意味している。彼女たちは、ひとの手助けをすることを期待され、また黙ってそれをする「すばらしい女性」なのである。まことに皮肉な言葉ではある。ロンドン郊外の、ある英国国教会の教区を舞台とし、主としてその周辺の人々を描くこの小説では、彼女たちは教会の雑務を一手に引き受けている。一人称の語り手で主人公である Mildred Lathbury もその一人であり、“capable of dealing with most of the stock situations or even the great moments of life — birth, marriage, death, the successful jumble sale, the garden fête spoilt by bad weather” (p. 6) と自認しているが、誕生や死とがらくた市が同列に並べられているのも、こうした出来事のどれにあっても、「すばらしい女性」は主人公になることはなく、いつもそれを“observe”するもの、手をかすもの、であるからである。しかしこの作品は、すばらしい観察者が、そのうえにドラマの主役をも務めることができることを、Mildred をとおして示しているのである。

* * * * *

Mildred は一人でフラットに暮し、遺産もあるのだろうがパートタイムで“impoverished gentlewomen” 援助の仕事をしている自立した人間である。

1) *Excellent Women* (1952). テキストは E. P. Dutton 版を用いた。以下これからの引用はページ数のみを示す。

牧師館の一部をフラットにすることにした Julian Malory 牧師とその姉の Winifred が、Mildred にそこに住まないかといっても、今の一人住いを捨てる気はない。“I valued my independence very dearly” (p. 17) と思うのである。ただ彼女は現代のフェミニストと違って、それを声高に主張はしない。“I was now old enough to become fussy and spinsterish if I wanted to” (p. 11-12) と、自分自身にたいしてさえ、なんとなく弁解口調である。これは、彼女が “cannons’ widows, clergymen’s sons, Anglo-Catholic gentlewomen, church people...all so worthy that they sounded almost unpleasant” (p. 17) といって、自分と同類で、一緒にいると一番気楽でくつろげるまじめな人たちを揶揄するのと同じで、彼女の、自分をも客観的に見る知性と余裕を示す言葉である。そんな彼女が第二次世界大戦直後のイギリスの小さな社会の中の間人模様をどう見、どう考えたかを読んでいくことに、この小説のおもしろみの一つがある。

彼女の周りの人たちが彼女ほど大人でないところに、いろいろな喜劇的場面が展開する。たとえば、Winifred は40歳をかなり越えているが、何かというと少女のように “exciting” という、Forster のいうところの、フラットな人物である。彼らのフラットに住むようになり、やがて弟の婚約者になる美人の Allegra に夢中になって、ずっと年下の彼女に子供扱いされても喜々としている。Mildred は彼女をはじめから策士と考えて用心しているところがあるのに、Winifred はまるで彼女を疑わず、しまいには自分が牧師館から追い出されそうになってはじめて、彼女の本質を知るのである。そもそも二人が結婚すれば、自分が邪魔な存在になるかもしれないということを考えたことがなかったのである。また、Sister Blatt も「すばらしい女性」であるが、威勢のよい巨体の持ち主で自転車に乗って元気よく走る姿がよく描かれる。Julian が塗料を塗っているときの、彼女の “helpful advice” (p. 40) は、見事に彼女の野次馬根性を表しているが、それで彼女は手伝っているつもりなのである。こういう人物のスケッチを楽しみながら、読者は、それを語る Mildred の冷静な目を意識するのである。まさに Mildred はすぐれた観察者

である。

彼女の語りに、一層深みを与えているものに、彼女のあまり口にしない、老後の不安がある。がらくた市に出された写真立ての中に写真が入っているのを見て、Winifred が人間もいらなくなるとがらくた市に出されるみたい、年をとるとよけいそう思うようになったと、いう場面がある (p. 39)。Mildred は、黙っているが、私こそ誰の人生の第一の人間ではないのだと、考えている。また、後に親しくなった人類学者の Everard Bone が、学会の会長が最近亡くなり、未亡人は自由になって好きなことをしている、それが一番だと、いうのになんて、その年になって自由が本当に欲しいかしらと、答えている (p. 178)。また、友達の、独断的で気分屋の Dora と話していて、ふと 2、30 年後に一緒に住んで、つまらないことで言い合いをしている自分たち二人の老いの姿を思い浮かべる場面もある (p. 105)。彼女の不安を表す場面はこれだけで数も少なくさりげないものであるが、こんな思いや覚悟を持った上で、一人暮らしを大切に、楽しんでいることが、作品の基調としてあるのである。彼女がセンチメンタルな Winifred と、この話をしたくなかった気持ちも理解できる。

彼女の、距離を置いた物の見方についてはすでに述べたが、それが悩んでいるときの救いになる。たとえば、Julian が婚約してから、彼女は、ふられたかわいそうな女という役割をみんなに押し付けられることになる。いくら否定しても、人々はその思い込みを改めてはくれない。当の Julian もその一人だ。婚約のことを理解してくれてうれしい。ショックだっただろうと、いう。いつもは穏やかな物言いをする彼女が、このときはいつになくはっきりと、私はあなたを愛していたのではありません、結婚してほしいなどと思ったことはありませんと、いう。それでも Julian は、“You are not the kind of person to expect things as your right even though they may be” (p. 133) と、いって、自分の思い違いに気づくことはない。相手の気持ちを思いやっているようでいて、実は自分の思い込みを押し付ける無神経さに、彼女はうんざりしているに違いない。しかし彼女は、“I was obviously re-

garded in the parish as the chief of the rejected ones and I must fill the position with as much dignity as I could” (p. 170) と、考えるのである。自分を客観的に眺め、おもしろがってしまうのは、彼女の特徴で、それが苦境において彼女の救いとなったと、自分でいっているが、それはまた、彼女の語りを明るく、軽快なものにしているのである。

* * * * *

Mildred は、下のフラットに引っ越してきた、人類学者の Helena と、夫のハンサムで魅力的な Rocky との出会いをつうじて変身する。イタリア駐在の海軍士官だった彼が、Helena の留守に帰ってきたときから、彼女はいつもの彼女ではない。あまりハンサムなので、失礼なほど見つめていたし (p. 30), その夜彼らのフラットで飲んだワインのせいかといいいながら、その夜は熱に浮かされたようになっていて、いつものお祈りを忘れて寝てしまうのである。たしかに Rocky は、ハンサムなだけではなく、感じがいい。社交的で、お世辞も嫌みがない。エプロンをとったり、髪を撫で付けたりしながら、こんな格好ですみませんという彼女に、すてきですよと、“such a way that he could almost have meant it” (p. 34) にいった。この “almost” は、“rather” perhaps” とともに断定的な表現を避けたがる彼女の口癖で、頻繁に使われているものではあるが、ここではのほせる自分を抑える気持ちを表すものである。また、彼女はイタリアで Rocky が海軍婦人部隊の士官たち相手にあの魅力を振りまいていたことを、思いだして、ただ調子のいいだけの人よと、自分に言い聞かせたり、牧師や教会の人たちのような “worthwhile” な人ではないと、思ってもみる。しかし “worthwhile” というのは、“excellent” や、後で述べる “virtue” と同じように、それだけではおもしろくないと、彼女は思うのである。

Mildred は、Rocky にのほせている自分の気持ちをかなりオープンに話している。Julian は、まるで恋でもしてみたいですねと、からかいはするが、

本気にはしていない。Winifred は、あなたはけっして間違ったこと、馬鹿なことをする人じゃないわねと、いい、Mildred も、悲しいことにまったくそのとおりだと、思う。しかし “Virtue is an excellent thing and we should all strive after it, but it can sometimes be a little depressing” (p. 44) と、考えて、自他ともに認める身持ちの堅い Mildred は、いま気持ちのうえで、そこから脱皮しようとしているのである。

Dora の兄の William は、昔は結婚することになるかもしれないと思ったこともある人ではあるが、今では毎年春に一度一緒に食事をするだけの仲になっている。彼はまったくの独身主義者なのである。彼との食事中に Mildred が Rocky は私のタイプだというと、William は驚いて絶句する。しかし Rocky のことを本気にしたわけではない。結婚なんて考えちゃいけない、“I always think of you as being so very balanced and sensible, such an excellent woman” (p. 69)、われわれは人生の “observer” だ、結婚は他の人に任せておけばいいのだと、いう。彼女の揺れる心を察知して、それに異議をとなえているのである。“observer” だなんて、私はそんな “unpleasant in-human sort of person” に見えるのかしらと、彼女は思うが、それにしても、彼の言葉にはうれしくない言葉が並んでいる。しかし、それが今まで彼女に与えられた役割であり、それにはまっているかぎり、彼女も周囲のものも安心だったのである。William の言葉には、自分は結婚する気はまるでないのに、Mildred を他の人とも結婚させずに、自分の仲間にとどめておこうとするエゴイズムが、表れている。彼のこんな偏狭さ、気むずかしさは、明るく屈託のない Rocky と比べると、一層うっとうしい。彼女は、こんなきれいな春の日にこんな人とここに座っていたくないと、思うのである。

Rocky とお茶を飲みに行った場面は、対照的である。“He was so gay and amusing and he made me feel that I was gay and amusing too and some of the things I said was really quite witty” (p. 75) と、いうように、彼女の話し方までいつもと違う。そして、いつもは調子にのりそうになると、海軍婦人部隊の士官を思い出すことにしているのに、この日は、家に帰って

から夜になってやっと彼女たちを思い出すのだ。ところで、ひとの言葉を紹介するとき、Mildred の表現には、副詞が付くことが多く、彼女の、口には出さない批判の気持ちを表している。ところが、Rocky のこととなると、この批判精神が眠っているのか、こんな副詞がほとんど付かない。ただ、この引用で繰り返される “gay”, “amusing” という形容詞に、語り手ではなくて作者が、Rocky は明るく調子いいが、深みのない人間であることをにおわせているように思える。お茶に出かける前に二人は家の前でばったり出会うが、このとき彼女が持っていたミモザの花を見て、感嘆の声をあげ、イタリアを思い出すというのも、彼らしくありきたりだ。一方、Mildred は、“It’s just that it seemed such a lovely day and I wanted it” (p. 74) と、いって、慎ましくささやかなものに喜びを見いだす彼女の人が柄が表れている。この花の半分を、彼女は Rocky に分けてやり、それを両方とも Rocky の家に置いて、お茶に行った。それを、夜になって思い出すが、下で Helena と Rocky の笑い声が聞こえて、取りに行けない。二人は、日頃口論が絶えないのに、この日にかぎって、なごやかそうなのも皮肉である。こうして彼女は “disturbed feeling which was most unlike me” (p. 74) を味わう。この悩ましさは嫉妬の混じった淋しさであろう。翌日返してもらったミモザは昨日の、春らしいふわふわとした美しさを失っていた。彼女の恋の将来を暗示しているようである。

このように心を揺すられ、高揚した気分と、悩ましい気持ちとを味わう彼女は、まさに恋をしているのである。ほとんど誰にもそれと気づかれないが。ただ何人かの人々が彼女の外見の変化に気づいている。Helena と Everard の学会での発表をみんなで一緒に聞きに行くのに、彼女はコートに合う新しい帽子をかぶっている。Rocky がすかさずそれを褒めて、彼女を喜ばせている。また、久しぶりに遊びにきた Dora が、彼女の変ったのに驚いている。彼女は化粧も少し濃く、髪型に気を付け、服も以前より少ししゃれたものを着るようになっているのである。そして30過ぎたらもう駄目ねといって、色気をなくしてしまった Dora の着るものが気になり、二人でしゃれたレス

トランへ行っても、ロマンティックなその場の雰囲気合わない Dora いるのを侘しいと思うのである。ときには苦しくて、“Love was rather a terrible thing.... Not perhaps my cup of tea” (p. 100) と、思うこともあるが、彼女は Dora のような、夢のない生活にもう納まてはいられないのである。

Helena は物語の初めから Rocky が帰ってくるのを喜んでいなかった。一緒に研究している Everard に惚れていたからである。Rocky も家事や料理が下手でやる気のない Helena にいらいらして、二人はあまりしっくりいっていない。そしてある日 Helena が家出をする。ここから Mildred は彼らに巻き込まれ、振り回されることになる。妻に逃げられて動転している Rocky を慰め、食事を作ってやり、Helena の荷物を届け、田舎へ引きこもった Rocky の家具の送りだしをし、自分の家具まで持って行かれたと怒る Helena の代わりに手紙を書き、挙げ句の果てに、夫とのよりをもどしたい Helena のために Rocky に手紙を書いたり、二人にいいように利用されている。そして得たものは、Helena が戻ってくるのを喜んだ Rocky が持ってきた菊の花束だけである。それも出がけに庭から乱暴に切り取って結わえてもいない花束だった。Mildred は “...why it is that we can never stop trying to analyse the motives of people who have no personal interest in us, in the vain hope of finding that perhaps they may have just a little after all” (p. 221) と、思う。本当には自分に関心をもっていない Rocky を恋する悲しさを、今までにも感じているはずであるが、ここまでそれを述べることはなかった。“We” を使って一般論として語るのが、彼女の特徴の一つであるが、今まではこのように距離を置いた見方ができなかったのではなかろうか。

Mildred が Rocky と別れる場面が三つある。初めは、彼が送ってもらうべき家具のリストを一方的に預けて、田舎へ去って行くときである。彼女は彼のタクシーが見えなくなるまで見送り、その後、何も食べる気もせず、教会へ行って一人座っている。たまたま入ってきた人に病気じゃないかと、き

かれるほどに、彼女は落ち込んでいたのである。そうはいっても、何百年の敬虔な祈りのこもったこの場所が私の心を慰めてくれると、思い、またすぐにこの教会はまだできて70年だったわと、考える茶目っけは、健在である。次の別れは、前述の菊の花束をもらった後である。Helena と落ち合うために出て行く Rocky の乗ったタクシーを、今度も彼女は、見えなくなるまで見送る。そして前回の別れと比較して、前の方が憂鬱だったけど、どこか楽しいところもあったと、思う。こんどは、がっくりと気落ちしたという。前回、もう会えないという悲しみとともに、ひょっとすると……という、かすかな望みもあったのだろう。

二度目の別れで、彼女は完全に夢を碎かれるが、かえってそれで吹っ切れたのか、その後は少なくとも表面的には普通の日常に戻り、すぐ Everard のことを考えはじめる。最後の別れは、彼ら二人がフラットを引き払って、田舎へ行くときである。今度は別れるのは楽だったと、いっただけでその場面の描写はない。前夜、下のフラットに招かれている場面でも彼女は非常にさめている。たとえば、わたしたちがいなくなったらどうするのという Helena の問いに、Rocky が、もともと彼女には彼女の生活があったんだと、答えたのを皮切りに、二人で彼女のこれからをあれこれ話し合っているのを聞いて、彼女は、まるで私がここにいないみたいと、心の中で皮肉っている。また、Everard が彼女をあちこちへ連れ出して、彼女の視野を広げてくれるかもしれないと、Helena がいったのにたいして、“‘Yes, it might,’ I said humbly from my narrowness” (p. 238) と、応じている。冷静で皮肉で、自分をも笑える Mildred である。

Rocky と出会ってしばらくして、彼女は “... I have so far missed not only the experience of marriage, but the perhaps even greater and more ennobling one of having loved and lost” (p. 449) と、いっていたが、Rocky を恋する華やぎと、報われない悲しみを、彼女は知って、いま成長している。美しさのあせたミモザを返されて、“I must not allow myself to have feelings, but must only observe the effects of other people’s” (p. 76)

と、思ったこともあるが、“Perhaps it’s better to be unhappy than not to feel anything at all” (p. 115) なのである。「すばらしい女性」という枠の中で、抑えられていた “normal feelings” (p. 190) を、彼女は解放することができた。“Excellent” で “virtuous” だがおもしろくなく佻しい人から、“sensible” であってかわいい女になったのである。ただ “observe” するだけでなく、参加する人になったのである。なお「すばらしい女性」の中の “normal feelings” を最初に認識し言及するのは Everard であった。

* * * * *

Rocky のドラマでは、彼女はやはりわき役であったが、Everard のドラマではいよいよ主役になる。もっとも、彼女の Everard にたいする表現は屈折していて、それが分かりにくい。初めて Helena のフラットで会った頃は、本当に彼にいい印象をもっていない。つんと尖った高い鼻は近寄りがたい印象だし、無愛想で話しにくい人である。しかし、しばらくして彼女がときどき出かけるロンドンの教会で彼を見かけたときから、彼女は彼に興味を持つようになる。彼は会衆の中で一際目だつハンサムだと、認め、“I felt I could almost understand the attraction he might have for the kind of person who is drawn to the difficult, the unusual, even the unpleasant” (p. 50) という。この持って回った表現、ひと事のような表現が、かえって彼女の、彼にたいする拘りを示しているようである。たしかに、一般受けのする Rocky に今くびったけの彼女にとって、このような男はおびでないのかもしれないが。しかし、彼女は本質的にはこういう難しい人にもよいところを見つけられる大人の観察者だったはずである。

彼女は Everard が本当に信者かどうか知りたくて、Helena のところへ出かけて行く。がらくた市に出すものがあるか尋ねがてらというが、さっそくその日に行くあたり、どちらが本当の目的か怪しい。Everard のことを切り出すときの調子は “what I hoped was a casual tone” (p. 53) で、やはり非

常に意識していることは明かである。いつも Everard の話になると目が輝く Helena は、あなたのような人が上に住んでいてうれしいと、いったのを聞いて、彼女は Everard に会っただけで私の株が上がったと、おもしろがるのはいいとして、*“For Helena's sake, if not for my own, I ought perhaps to make some friendly overture if he were there next week”* (p. 56) と、いうのは、やりすぎではないだろうか。格好をつける Mildred がわれわれにはほほえましく滑稽である。

数週間後、教会で会った Everard が、その日の説教について率直に話すので、彼女は彼が少し気に入ったという。ここでも *“I felt I had made a slight advance, that an infinitesimal amount of virtue had gone out of me, and although I did not really like him I did not feel so actively hostile to him as I had before”* (p. 80) と、先の引用を受けて、まるで義務でも果たしたようなことをいい、本当は好きじゃないというのも、まともには受け取りにくい。非常に彼に関心があり、意識しているのだから。美しい春の日に、それにワインでも飲めば、Rocky のことを思うのもいいが、今日のような暗い日には、最後の審判の日や Everard のことでも考えるのがいいと、いうのもわざとらしい。しかし、この言葉には一面の真実がある。美しい春の日のように人の心を浮き立たせる Rocky の魅力は Everard にはない。彼はまじめで少し暗いのである。

Everard について、彼女は *“... there was no warmth or charm about his personality”* (p. 92) と、珍しく断定的にいていたが、Everard は、魅力はともかく、心配りのいい暖かい人間であることが分かってくる。そのうえ、彼女に関心があり、好意をもっている様子もよく分かるのに、Mildred はそれを素直に認めないし、他の人には愛想のいい彼女が Everard にたいしては妙に不機嫌な様子を見せるのである。まず、前述の学会で、発表が終わり人々があちこちにかたまって話あっている中で、Mildred は一人手持ち無沙汰に立っていた。このとき、やってきて彼女の相手をして、気まずい思いから救ってくれたのは Everard であった。もっとも会話ははずまず、義理で

来たのだと、彼女は思っている。その後四人で食事をしているうちに、クリスチャンについての話になり、Mildred と Everard が組んで議論をすることになるが、成行き上やむを得なかったんだと、彼女は思う。帰りも、二人が並んで歩くことになり、“almost as if he had arranged it that way” (p. 98) とは感じるが、私と歩きたかったからじゃないと、いう。なぜなら会話がはずまなかったからだ。彼女はいつも会話がスムーズにいかないというだけで、彼は自分に関心がないと決めつけているようである。この前後に Helena が彼女をからかうように、Everard はあなたが好きなようねと、いったり、彼と仲良く話していたけど、告白でもされたのなどと、いう。Mildred は、この口調について “Her tone was rather light and cruel as if it were the most impossible thing in the world” (p. 99) と、いうだけでこの発言の内容について何もいわない。無神経なところはあるが、意地悪ではない Helena にこんな言い方をさせる雰囲気は二人の間にあったはずで、彼女は自分の気持ちを読者に隠しているのである。

そのうち、次第に Everard は、積極的に彼女を誘うようになる。彼に誘われて行ったパブで、彼女はよく分からないでビターを注文する。またもや会話はぎくしゃくしてうまくいかない。彼女がほとんど飲んでいないのに気がついた Everard が、ビターは嫌なんだろうと、いって他の飲物を買ってくる。このとき彼が “less withdrawn” (p. 142) だったと、彼女がいうところを見れば、彼はいつも彼女と話すとき、かたくなって遠慮していたのではないだろうか。また、Rocky と行ったパブでも彼女はビターを注文し、ほとんど口をつけていなかったのに、Rocky はこれに気づかず Julian のことで彼女をからかっていたのを、われわれは思い出す。このようにして、作者はさりげなく Rocky と Everard を読者に比較させているのである。Mildred 自身は何もいわないが。飲み慣れてなくて、よく分からなかったと、いう彼女に、Everard は、あなたはそのままいいんですと、いい、なかなかいい雰囲気である。しかし、彼女はこの時も、Helena の話がしたくて誘ったんだわと、考えるのである。“It was not for the pleasure of my com-

pany that Everard Bone had asked me out this evening —— or rather not even asked me and given me the chance of appearing better dressed and without my string bag, but had waylaid me in the street” (p. 142) と、恨みがましい。事実、その日は Everard が彼女のオフィスの前で待っていて、たまたま所帯じみた袋を持ち、古い服を着た彼女を誘ったのである。もっとちゃんとした格好で来たかったという、彼女の女心も分かるが、わざとひねくれている感じもする。

この日はさらに、彼の母親のところでの夕食に誘われ、彼女はためらいもなくついて行く。けっこう Everard をにくからず思っているのだ。ここで Mrs. Bone という喜劇的で印象的な人物が登場する。気むずかしい上流婦人の彼女は、ユニークな話題の持ち主で、家具につく虫の新しい防除方法を話したり、イギリスが鳥たちの領土になる恐れがあるから、一生懸命、敵である鳥をハロツズから取り寄せて食べているのだと、いう。また、固有の宗教をもっていたアフリカの人々を改宗させたのは宣教師の横暴だというのも彼女の持論である。この晩 Mildred は、一人で彼女のお相手を引受けさせられて疲れたと、怒っているが、Everard は、あなたは母に気に入られましたね、たいていの人とは母と会話が続けられないです、“I admired the way you did it” (p. 150) と、いう。これにたいして彼女は、牧師の娘ですから人に合わせるのは慣れているんですと、答える。しかし彼女のいう “platitude” で Mrs. Bone の相手は勤まらない。また、Mildred は、おかあさまはいろいろなことに興味がおありで、すてきです、お年寄りはお自分のことと病気のことしか考えない人が多いのにと、いうところからみれば、彼女が本当に Mrs. Bone という人に興味をもち、おざなりでない会話を交わしたことが分かる。そして Everard は、Mildred のそういうところに関心し、彼女の暖かい聡明さ、読者には分かっているが、周囲の人々には分かっていた聡明さ、を理解していることも分かるのである。

人々に理解されていないことが淋しく、Rocky に相手にされていないことが悲しかった Mildred は、Everard の中に良き理解者を得ているのである。

そしてそれに気づいていないわけでもない。

前述の Rocky と行ったパブで Rocky が、彼女をからかい、Everard がここにて、手を握ってくれるといいねと、いったとき、彼女は「一瞬のことだが」彼がいてくれたらと、思う。彼なら、からかわずに、Julian と Allegra が公園で手を握り合っていたのを見て心配している彼女の気持ちを理解してくれると、思ったからである。“He was quiet and sensible and a church-goer” (p. 107) だから。“Sensible” は、後で Everard が Mildred についていう形容詞で、二人が同質の人間であることを表している。

二度目のデートでも二人はぎくしゃくしている。今度も Everard が勝手にオフィスの前に立っていて、彼女は知らん顔をして歩き過ぎる。追いかけてきた彼にたいする挨拶も “ungracefully” (p. 186) にする。お昼と一緒にと誘われても、どうしてさきに連絡しないのと怒っている。だから、レストランの近くへ来て Everard はこういう。“You haven't said in so many words that you will have lunch with me...but as we seem to be going in the right direction I assume that you will” (p. 187) と、なんと無理屈っぽい。社交的な Rocky に比べて見劣りするところだ。Mildred も調子を合わせて、“Oh, well, I suppose” と、“indifferently” に答える。しかし彼女はさすがに自分でもあまりだと思ったのだろう、“You must think me very impolite...but the worst side of me seems to be coming out today” (p. 187-88) と、いうが、これもまた無理屈っぽくまわりくどくて、Everard といい勝負だ。

二人が行ったレストランは William のときと同じで、二人の注文の仕方などが対比される。Everard もこだわりはあるが、William ほどうるさくない。ワインのせい気分もほぐれている。しかし、Mildred が、オーヴンクロスはいつもオーヴンのそばにかけてあると、いったことから、Everard が “Well, you're a sensible person. It's just the kind of thing you would have” (p. 189) と、いうと、彼女は、“Oh, dear, one was to be for ever cast down” (p. 189) と、彼にまで「すばらしい女性」扱いをされたと思っ

てがっかりする。本当は冗談めかしているだけかとも思えるが。その後、Helena のような人は好みではなく、結婚相手には“sensible”な人がいいと、Everard がいう。会話の流れからいって、これは愛の告白に近いと、読者は思うが、Mildred の受け止め方は分からない。ただ彼の言い方を“vaguely”と、いうだけである。“...women like me really expected very little — nothing almost” (p. 37) と、考えて生きてきた彼女としては、慎重になるのも自然かもしれない。あるいは、Rocky にたいする報われない愛の悲しみもほとんど口にせず、少し表現したときには一般論としてであったことを考えると、なまの喜びや悲しみは、それが強いほど、胸にしまっているのではないかとも思われる。

Mildred の Everard への思いは、彼について彼女がめぐる様々な想像によって間接的に表されていると、思われる。Allegra に牧師館を出てはと、いわれた Winifred が、泣きながら雨に濡れて飛び込んで来たり、それを知った Julian が、Allegra と喧嘩し姉を探してやってきたりと、すったもんだの一夜が明けて疲れきった Mildred のところへ電話がかかってくる。Everard だが、はじめてファースト・ネームで呼びかけられて、彼女は用心する。そのうえ、夕食に誘われたのはいいのだが、肉があるというのにひっかって、自分が肉を焼き、野菜を料理している姿を想像し、腰が痛くなるのまで感じてしまう。疲れていてその気になれなかったのだろう、誘いを断わる。だが、電話を切るなり、Everard が、料理ブック片手に慣れない料理をしている姿をあれこれ想像し、しまいには涙が出そうになるのである。

Napier 夫妻がよりをもどしてからは、Everard のために肉を焼いてあげたいとか、彼が属している先史学会に入って発掘の仕事をしているところを想像したあげく、この頃連絡のない Everard は病気で一人寝ているのではないかと思う始末である。

そして今度は彼女が人類学会の建物の前で彼を待ち伏せ、一緒に食事をし、次のディナーの約束までできる。この帰り道、Everard のフラットでのディナーの様子や、自分も人類学会に入って発表会でとてもいい質問をしている

ところを想像しているうちに帰りついてしまうのである。もう読者には彼女の気持ちは明らかである。想像が先走ってはいるが、Rocky のときのようにただ一緒にいることを楽しむのではなく、二人での暮らしを、その将来を考えているのである。そう考えれば、前回の食事のときの“sensible”な人がいいという Everard の言葉もそれなりに受け止めているのであらうと思われる。

こうして待っていたディナーの日、彼女は新調のドレスを着ている。おしゃれになったといっても目だたない服装だった彼女が、Helena がよく着ていた黒のドレスを着ているのだ。髪も後ろにきっちりとなでつけた。途中で出会った、無頓着な Miss Statham が驚き、William が見違えたというほどだから、相当なイメージ・チェンジをしたようである。さきにあげた彼女の想像の場面からも分かるのだが、彼女は自分の将来の姿として、家事をし、病気の夫の看病をするといった伝統的な女の役割とともに、Helena に触発されて、知的に夫とかかわれる女を思い描いている。それがこの日の服装にも表れているといえよう。

二人のディナーは、おいしい鳥がもうできているし（彼女の料理が当てにされていないのである）、ほどよく温まったワインがあり、会話も楽しい。珍しく彼女が“pleasant and cosy”（p. 254）な雰囲気だという。彼女も今日は素直になっている。いよいよハッピー・エンドだということなのであるが、作者はそれをはっきりさせない。いま書いている本の校正やインデックス作りをしてくれないかと、Everard はとても遠慮がちにいいだす。そして彼女が引き受けると、こんなところを見たことがないと、彼女が思うほどに喜ぶ。ただ単純に仕事を引き受ける人ができてうれしいのだろうか。かなり無愛想な Everard がそれだけのことでそれほど感情を表すようには思えないし、ここまでの成行きもそれだけでないことを示している。ただ作者は、それを曖昧なままにしているのである。このあとの Mildred の “...before long I should be certain to find myself at his sink peeling potatoes and washing up; that would be a nice change when both proofreading and indexing

began to pall” (p. 255) という言葉も、次々仕事を押し付けられて報われない「すばらしい女性」の皮肉ともとれるし、素直に彼女の夢がかかないそうだと思っているともとれる。状況的には後者であるが、ただ女に与えられる役割にたいする作者の皮肉はここにあると思う。

小説は、“...what with my duty there and the work I was going to do for Everard, it seemed as if I might be going to have what Helena called ‘a full life’ after all” (p. 256) という Mildred の言葉で終わる。これもまた曖昧である。Allegra との婚約を解消して、Mildred を訪ねてきたあの夜、Julian は、今まで遠くばかりを見ていたが身近なところにいい人がいたんだと、これもまた求婚に近いことをいう。この時も、Mildred は、いつもと同じくそれについて読者にも何もいわず、ただ電気ストーヴの火を見つめてこれが本物の石炭ならいいのにと、いうだけである。大事な場面で彼女は思っていることを口にしないのである。しかし、そののち「すばらしい女性」が二人、牧師館に住むことになったと聞いて、これで Julian は、Allegra のような女からは安全だけど、それがかawaii そうだといって、“Perhaps it might after all be my duty to marry him, if only to save him from being too well protected” (p. 217) と、考えるのである。先の引用の “my duty” は、これを受けての言葉で、Julian と結婚することを意味している。彼女は自分の結婚のことを口にするのはここだけなのであるが、それを義務と言いつたところは、いかにも彼女らしい。また Helena のいう “full life” とは、教会の仕事などするのは、“women who *didn't* have a full life in the accepted sense” (p. 238) だと、いったのをうけている。その意味からも、小説は彼女の二つの結婚の可能性を示唆して終わっていることになる。Everard のための仕事とは、結婚して彼を支えることなのである。

二つの可能性があげられているが、彼女がどちらを選ぶかはいうまでもない。Julian が Mildred を適当な結婚相手と認めたとはいっても、彼は彼女を愛しているわけでもないし、その心を理解しているわけでもない。相変わず、自分が求めさえすれば、彼女が喜んで結婚し、自分の仕事を助け、姉と

もうまくやってくれると思っているだけである。Everard と Mildred についても、二人の気持ちが愛といえるものであるかはよく分からない。Mildred が Rocky にもったようなロマンティックな気持ちはないのかもしれない。しかしお互いに好意をもち、理解し合っているのは確かであり、一緒にうまくやっていけそうだという“sensible”な判断が二人を結び付けることになったように思われる。ついでながら、Pym の次の小説 *Jane and Prudence* で彼ら二人が結婚したと語られている。²⁾

小説のはじめの方で、Mildred は、自分は美しくないが、同じような女性に希望を与えた Jane Eyre ではないと、いった。しかし、彼女は「すばらしい女性」に希望を与える“Jane Eyre”となった。ロマンティックな恋の相手“Rochester”も、内助の功だけを期待する“St. John”も選ばず、彼女は第三の人、本当に心の通い合う人、Everard を選ぶのであるが。

* * * * *

この小説には、Helena, Rocky, Julian をはじめ、Mrs. Bane, Miss Blatt, Dora, William, Winifred などおもしろい人物が数多く登場し、Mildred によって印象深く語られ、それぞれにこの喜劇の重要な登場人物となっている。この他にも、Mildred の家のお掃除をする Mrs. Morris については、宗教についての少々偏狭な考え方や、教会活動のときの彼女のおしゃべりや冗談が、少し他の人々と波長が合わず、それにたいする人々の反応に、彼らとの階級の違いが感じられておもしろい。確かにこうした人物が小説を複雑で奥行きのあるものにしているが、それを語る Mildred がさらにおもしろいし、彼女の変化と成長、そして賢明な夫選びが、この小説のテーマである。Jane Austen が思い出される。一つの小さな社会を描いている点も似ている。しかし、第二次世界大戦直後のロンドンの近郊では、女主人公は、もう親の家

2) *Jane and Prudence* (Granada, 1953), p. 142.

にいない。仕事を持って自立し、老後の不安はあっても、一人の暮しに満足している。そして本当に理解し合える人を見つけたとき結婚を決意するのである。

Mildred は、Julian をめぐっては Allegra と、Rocky, Everard をめぐっては Helena とライヴァルの関係にある。Allegra は、美貌を武器に男を手玉にとる女であり、Helena はキャリア・ウーマンで、家事を夫に任せて平気である。二人とも強く激しい女である。しかし Allegra は、うまく男をつかまえて生活の安定を図ろうとしているのであって、男に依存していて、自立した女ではない。Helena は経済的には自立しているが、Rocky と離れると淋しくなってデヴォンシャーの母親の家に帰ってしまい、意外に“conventional” (p. 185) な面を見せる。そのうえ Mildred の仲介で夫のもとへ戻って行く。彼女は精神的には自立していない、一人では暮らせない人なのである。一方、Mildred は、表面的には穏やかで受身ではあるが、本当は精神的にも、経済的にも自立した強い女なのである。また、Allegra はカーテンを Winifred と Mildred に作らせているところで分かるように、家事ができない。Helena もそうである。Mildred だけが上手に料理をし、家庭で夫を支えられる女なのである。この時代の女性として、主人公も作者もこれが理想の女性の姿だと思っていたのである。作者は、そのうえに Mildred を精神的、経済的に自立した女性とすることで、彼女を新しい理想の女性に仕立てあげたのである。表面的にはあまりにも慎ましく地味で目立たなかった彼女を、Rocky との恋によって変身させ、抑えられていた “normal feelings” を解放させ、“narrowness” を克服させて、魅力もある女性に変身させたのである。Mildred は「すばらしい女性」から本当のすばらしい女性となって、Everard を得るのである。

表題は複数の “Excellent Women” である。だからこれは Mildred 一人のことをいっているのではない。作者は自分もその一人である、多くのおとしめられている「すばらしい女性」たちの中に、他にも Mildred がいるのだと主張しているのであろう。Winifred や Dora にも主役になる可能性がある。